

旧河曲同窓会付属図書館解題目録

1、古今事文類聚

前集 60 卷 21 冊。後集 50 卷 20 冊。続集 28 卷 13 冊。別集 32 卷 14 冊。宋、祝穆撰。新集 36 卷 15 冊、外集 15 卷 8 冊。元、富大用撰遺集 15 卷 9 冊。元・祝淵撰「凡ての事文（犀書の要語、事実、詩等）を分類して聚めたもの」ということから名づける。我国では寛文 6 年（1666）の刊行がある。

2、劉向説苑纂註

20 卷 10 冊。開嘉撰。寛政 5 年(1793)刊。「説苑」の我国における良い参考書。
説苑——20 卷。漢の劉向撰。君道・臣術・建本・立節・貴徳・復恩等 20 篇に分け、始めに序説を述べ、後に逸話を列挙してある。

3、説郛

120 卷 150 冊。元陶宗儀編。説郛という名は、「揚子法書」の「大哉天地之為万物郛、五経之為衆説郛」という文句から取ったものである。この叢書は集めた書の全部を取ったものではなく、節録（ほどよく省いて記録する）したものである。後に 30 卷を失ったが、明の弘治年間(1488～1505)上海の郁文博という人が補って 100 卷とし、更に清の順治 4 年(1649)に陶珽という人が増補して 120 卷とした。この書には大学石経・大学古本補等の古いものから、漢唐宋元の時代に至る種々雑多のものがあ、1200 種のものを収めている。

4、説郛続

46 卷 51 冊。明の陶珽編、説郛は元代に止まるので、延は更に 46 部門に分けて、明人の著 527 種を雑鈔してこれに続けたもので、宋元の著も収めている。

5、古事類苑

127 卷 38 冊。神宮司庁編。我が国唯一の官撰百科大辞典で、全部で 30 部門より成り部門毎に項に分け、目を立てて項毎に初めに総説を掲げ、目の條下に古記録の本文を掲載し古書の録すべきものは殆んど網羅してある。明治 13 年 3 月より 35 年の歳月をかけて完成した。

6、猗蘭子

3 卷 3 冊。本多忠統著。この書は猗蘭台集（著者の詩文を集めたもの）7 卷、同二稿 5 卷同三稿 5 卷と合したものの 20 卷の中に含まれるもので、中国の子書に擬えて一家の忠を述べたもの、著者は神戸藩本多家初代の藩主で猗蘭はその号である。中御門天皇享保 20 年乙卯(1735)服部元喬の序がある。

7、(欠本)

8、三重県史談

上下 2 卷 1 冊。村上政太郎著。明治 27 年再版。小学校教則にしたがって、本県内郷土史の教科書にするため編纂したもの。上巻は神社仏閣及び偉人の伝記。下巻は上・中・近世、明治の概略。

9、桃園集

1 冊。湯原鶴太郎編。明治 31 年刊。神部藩主本多忠貫（最後の殿様）の歌集である。

10、勤王家黒田孝富小伝

1 冊。大西源一著、昭和 12 年刊。黒田孝富は亀山藩士で天保 5 年(1834)1 月 9 日生、本書は昭和 12 年 12 月 28 日武道家で勤王家である黒田孝富先生の 70 年祭に当り、その事蹟の追憶の目的で刊行したものである。

11、伊勢名所和歌集

上下 2 卷 2 冊。松田久秋編、佐々木弘綱校閲、明治 29 年刊。上巻は四季に、下巻は恋部雑部に分けて、359 人の詠歌が収めてある。編者は市内玉垣の人。

12、(欠本)

13、訂正増補 勢陽五鈴遺響

80 卷 11 冊。安岡親毅撰。明治 36 年刊。原本「五鈴遺響」は「いすずいきょう」というのが正しい。伊勢国の地誌で、首巻上・中・下の三巻に分け、上巻は国号、郡県各総論、中巻は風土・府治・種封各総論。下巻は式社・前誌・典故・冠名各総論をのせる。その次以下は各郡で巻が分けてある。天保 4 年(1833)刊。

1 4、月瀬記勝

2 卷 2 冊。齊藤正謙(拙堂)著。明治 14 年刊。天保元年(1830)月瀬観梅紀行の詩文である。下巻は付録として、星巖・山陽・小竹・棕隠・その他十数名の観梅の詩が集録してある。嘉永辛亥(4 年、1851)正謙の目序あり。

1 5、四日市誌

1 冊。明治 40 年刊。伊藤善太郎著となっているが、実際には四日市高等小学校訓導山崎清治。星野吉五郎。佐藤一海の三氏により編纂されたもので、四日市の起源、発達及び将来について概略してある。

1 6、(欠本)

1 7、一柳家史紀要

1 冊。一柳貞吉著。昭和 8 年刊。一柳家の系譜を基本とし、宗家の当主慎君及び著者の調査したものである。一柳監物ケンモツは神戸城主であって、神戸石橋町の竜光寺境内には分祀の基及び追悼碑あり。

1 8、(欠本)

1 9、(欠本)

2 0、徂徠集

30 卷 18 冊。荻生茂郷著。元文 5 年(1740)刊。著書の詩文集であり、歿後その門人等が相謀って出版したもの。元文元年丙辰(1736)本多忠統の序がある。

2 1、鼈頭近思録

14 卷 14 冊。宋の朱喜撰。原本「近思録」は宋の朱喜と呂祖謙の共撰、淳熙 2 年夏(1175)祖謙が寒泉精舎に朱子を訪い、周茂叔、程明導、程伊川、張載の著書及びその門人の記した語録を読んで、余りに広汎で初学者には不便であることがわかり、その大体について日用に切なもの 620 余を選んで 14 卷とし、「論語」の子張篇に千夏が「博く学んで篤く志し、切に問うて近く思はば仁其中にあり」という語をとって「近思録」と名づけた。

鼈頭——書物上欄に書き入れた注釈の文。

2 2、官板礼記大全

30 卷 30 冊。明の胡廣等奉勅撰、林道春点。承応 2 年(1653)版、礼記の参考書である。

礼記——「らいき」とよむ、また「れいき」ともいう。礼に関する雑記という義で

ある。周末秦漢時代の諸儒の古礼に関する説を輯めたもので、「小載礼」は漢の戴聖が更に当時の礼の記中からその要を取って 49 篇として礼を説いたもので現存の礼記である。

2 3、新鐫読本礼記

4 卷 4 冊。後藤世鈞点、明治 9 年刊。

鐫——ほる、ほりつけるの意

2 4、改正音訓礼記

4 卷 4 冊。後藤世鈞点。天保 10 年(1839)版。

2 5、礼記注疏

63 卷 30 冊。後漢の鄭玄注、唐の孔穎達疏、明の崇禎 12 年(1638)の刻印がある。

2 6、官板易経大全

24 卷 26 冊。明の胡広等奉勅撰。林道春点承応 2 年(1627)版。易経の参考書。

易経——周易ともいう。卜筮ボクゼイの法によって倫理道德を説いたもの。

卜筮——卜は亀甲を焼き、筮はめどぎを用いてうらなう。

27、改正音訓易経

2巻1冊。後藤出鈞点、文化9年(1812)の序がある。別に乾坤2冊組も2組ある。

28、周易注疏

9巻6冊。魏の^{オウヒツ}王弼注、唐の^{コウエイタク}孔穎達疏、清の嘉慶3年(1798)版。

29、官板詩経大全

19巻21冊(1巻1冊欠本)。明の胡広等奉勅撰、林道春点承応2年(1653)版。

詩経——殷代から春秋時代までの古詩3千余篇のうち311篇を纂修したもの、詩経の名
称は、朱熹に始まり、古は単に詩といわれた。今日に伝わるものは毛詩のみであるために、毛詩は
即ち詩経を意味する。

30、改正音訓詩経

上下2巻2冊。後藤世鈞点、文化9年(1812)の序がある。3組あり。

31、毛詩鄭箋

20巻5冊。後漢の^{テイゲン}鄭玄撰、寛延2年(1749)刊。

32、毛詩注疏

20巻20冊。後漢の鄭玄注、唐の孔穎達疏、明の崇禎3年(1629)の刻印あり。

33、官板書経大全

11巻11冊。明の胡広等奉勅撰、林道春点、書経の参考書である。

書経——虞・夏・商・周4代の政教を記録した書を孔子が^{サンテイ}刪定(字句または文章を削り去って修飾する)したもので、上古は「書」とのみだったが、漢になって「尚書」、宋以後は主として「書経」と称した。

34、改正音訓書経

2巻2冊。後藤世鈞点、文化9年(1812)の序がある。3組あり。

35、尚書注疏

20巻10冊。漢の孔安国注、唐の孔穎達疏、明の崇禎5年(1631)の刻印あり。

36、官板春秋大全

38巻38冊。明の胡広等奉勅撰、林道春点、承応2年(1653)版、春秋の参考書。

春秋——孔子が筆削(かくべきは書、削るべきはけずる)したと伝えられるもので、
魯の隠公より哀公に至る12代240年間のことを編年体で述べた歴史書である。紀元前722年から
前482年まで年代順に事実を記述したもの。

37、改正音訓春秋

1冊、後藤世鈞点、文化9年(1812)の序がある。3組あり、別に新鐫読本春秋(全)1冊もある。

38、春秋注疏

60巻30冊。晋の^{トヨ}杜預注、唐の孔穎達疏。明の崇禎11年(1637)の刻印あり。

39、春秋左氏伝校本

30巻15冊。秦鼎撰、文政7年(1824)補刻、春秋左氏伝の参考書。

春秋左氏伝——春秋を説いたもので、魯の史官左丘明があらわしたと伝えられているが、諸説があって一定していない。単に左氏伝または左伝ともいう。春秋公羊伝・春秋穀梁伝と共に春秋三伝といわれている。公穀二伝は、積意を主とした思想的なものであるが、左伝は史実を明らかにしようとした史的色彩が濃厚である。2組ある。

40、左繡

31巻16冊。^{フウリカ}馮李驊等撰。

41、春秋左氏伝評林

62 卷(70 卷のうち) 13 冊(15 冊のうち)。第 1、2 冊欠本、梅谿撰。

4 2、穀梁注疏

20 卷 5 冊。東晋の范甯注、唐の揚子勛疏。明の崇禎 8 年(1634)の刻印あり。尚、春秋穀梁伝は魯の穀梁赤の春秋伝である。

4 3、公羊注疏

28 卷 10 冊。後漢の何休注唐の徐彦疏。明の崇禎 7 年(1633)の刻印あり。尚春秋公羊伝は齊の公羊高の春秋伝である。

4 4、儀礼注疏

17 卷 14 冊。後漢の鄭玄注唐の賈公彦疏。明の崇禎 9 年(1635)の刻印あり。儀礼の参考注解書である。

儀礼——色々の細かい礼儀作法を記したもの。周公の作とも伝えているが、恐らく先秦の人が古くから伝習してきたものを輯録したものであろう。

4 5、周礼注疏

42 卷 20 冊。(後漢) 鄭玄注(唐) 賈公彦疏、「周礼」の参考注解書。明、崇禎元年(1627)の刻印がある。周礼——古くから周官とも呼ばれて周公理想の官制が記され、王道の制度が備わった。

(注)・礼記、易経、詩経、書経、春秋を五経という。

・五経に周礼、儀礼を加えて七経という。

4 6、韓詩外伝

10 卷 5 冊。(前漢) 韓嬰撰。韓嬰が伝えるところの詩というので韓詩という。古事、古語を雜引して詩句で証したものである。

4 7、論語集註

10 卷 4 冊。(宋) 朱熹撰。朱熹が理気説をもとにして論語を注釈したもの。(注) 理気説——天地の間にま

ず理があり、のち陰陽の気が運行して物を生ずるということ。

理は宇宙の本体、気はその現象。

論語——孔子の言、孔子と弟子の間答、孔子の弟子の言等を録したもの。「孔子がその弟子、時人に応答し、或は門人同志がいい合つて夫子に接問した語を、当時弟子が各々記録していたが、夫子歿して門人等がこれを輯めて論纂したから『論語』という」といわれている。

4 8、四書大全 論語(論語集注大全)

5 卷から 20 卷まで 16 卷(4 卷まで欠本) 8 冊。明、胡広等奉勅撰?

4 9、鰲頭論語

10 卷 4 冊。(宋) 朱子注。延寶 2 年(1674)刊。

5 0、四書匯參論語

20 卷 19 冊。(清) 王歩青撰。天保 11 年(1840)刊。

5 1、論語注疏

20 卷 4 冊。(魏) 何晏注。(宋) 邢昺疏。明、崇禎 10 年(1636)の刻印がある。

5 2、論語講義

2 冊。花輪時之輔述。深井鑑一郎編。明治 30 年(1897)刊。

5 3、鰲頭大学章句(全)

1 卷 1 冊。(宋) 朱熹撰。文久 3 年(1863)刊。旧本の大学の章句が錯雑しているため、程伊川の説に自己の意見を加えて順序を正し、殊に格物致知の意義の欠けているところを補ったものである。

大学——支那上古において、大学教育の要領(修身、齊家、治國、平天下の道)を述べたもの。もと「中

庸」と共に「礼記」中の一編であったものを、唐の韓愈、宋の二程子等がこれを貴重な書として着眼し、南宋の朱熹以後「論語」「孟子」「中庸」と共に四書の一つとして大いに天下に行われるようになった。著者については、子思とか曾子とか色々論議せられているが、要するに戦国時代の孔門の子弟の作ということになっている。

(注) 二程子——程顥(明道)、程頤(伊川)のことをいい、顥は頤の兄である。

54、大学大全

2巻2冊。(章句、或問)明、胡広等奉勅撰。明の永楽3年(1405)成る。四書大全36巻のうち。四書輯積(20巻、元の倪士毅著)をやや増損したもの。

55、大学衍義

43巻20冊。(宋)眞徳秀撰。天明7年(1787)刊。

56、四書匯参大学

3巻3冊。(清)王歩青撰。天保11年(1840)刊。

57、新刻改正 大学

1巻1冊。後藤世鈞点。安政5年(1858)刊。

58、大学講義(全)

1冊。藤沢南岳著。明治37年(1904)刊。

59、鼈頭中庸章句(全)

1巻1冊。(宋)朱熹撰。中庸の注解書。

中庸——四書の一つで、孔子の孫、子思の撰という。もと礼記中の一編であったが、後世尊重せられて単行するようになった。中は不偏、不倚、過不及なきことで、天下の正道をいい、庸は不易、平等で、天下の定理という意である。

60、中庸大全

3巻3冊。明。胡広等奉勅撰。(明)永楽中の作(1403~1424)。四書輯積をやや増損したもの。

61、四書匯参中庸

6巻6冊。(清)王歩青撰。天保11年(1840)刊。

62、新刻改正 中庸

1巻1冊。後藤世鈞点。安政5年(1858)刊。

63、鼈頭孟子

7巻4冊。(宋)朱熹撰。延寶2年(1674)刊。「孟子」の注解書。

孟子——孟軻(軻は孟子の名)の語及び問答等を録したもので7篇、仁義をもととして王道を行うことと、人間の性善を主張するところが根本思想になっている。

64、四書匯参孟子

14巻14冊。(清)王歩青撰。天保11年(1840)刊。

65、新刻改正

10巻4冊。後藤世鈞点。安政5年(1858)刊。

66、孟子注疏

14巻6冊。(後漢)趙岐注(宋)孫奭疏。明、崇禎6年(1632)の刻印がある。

67、重訂小学纂注

6巻4冊。(清)高愈撰。文政5年(1822)刊。「小学書」の参考注解書。

小学書——6巻。宋の劉子澄編。単に小学ともいう。巻頭に朱子の題字をのせ、内外の二篇に分かれている。立教、明倫、敬身、稽古、嘉言、善行の諸目をたてて、灑掃、応対、進退より修身、道德

の格言や忠臣孝子の事迹を集めて学童課程の書としたもの。

68、小学纂要

6巻4冊。近藤元粹編。明治14年(1881)刊。

69、小学句読集疏

10巻11冊。貝原篤信撰。天保9年(1838)刊。

70、小学 内篇外篇

2冊。山崎闇齋点。延寶4年(1676)刊。

71、小学 内篇外篇句読

6巻4冊。天台陳撰。寛文6年(1666)刊。

72、小学校本 内篇外篇

2冊。山崎点校本。内、外篇1冊は欠本である。天保14年(1843)刊。

73、御注孝経

1巻1冊。(唐)玄宗皇帝注。開元御注孝経ともいう。唐の開元10年(722)玄宗皇帝自ら^{キンブン}今文を主として孝経に注したもの。4組あり。

(注)御注——高貴な方のなされた注釈

孝経——1巻、曾子の門人が孔子と曾子の孝道に関する論説を筆記したものであるために孝経という。

古文孝経は漢の武帝の末に、魯の共王が孔子の旧宅の複壁の中から得た孝経で、その字が^{カト}蝌蚪の古文字であったことから名づけられた。これに対し、漢の初め顔貫等によって世に出たものを^{キンブン}今文孝経という。

(注)^{カトノジ}蝌蚪字——古代文字の一種で、その形が、おたまじゃくしの頭が大きくて尾が細いのに似ているところからいう。(蝌蚪は「おたまじゃくし」のこと)

74、孝経注疏

9巻1冊。(唐)玄宗注、(宋)^{ケイヘイ}邢昺疏。明、崇禎2年(1628)の刻印がある。

75、改正音訓 古文孝経

1冊。綽堂先生校本。

76、孝経講義

1冊。中沢信著。大正10年(1921)刊。

77、通徳類情

13巻8冊。沈重華撰？(清)乾隆辛卯(1771)著者の序がある。(乾隆——1736—1795)
暦の一種か？

78、女四書^{グイモンズエ}芸文図会

4篇4冊。清原宣明識。天保6年(1835)刊。花の巻を「曾大家女試図会」鳥の巻を「鄭氏女孝経図会」風の巻を「曾大家女論語図会」月の巻を「明孝慈烈女伝図会」として各々假名文に記して図会したものである。

(注)曾大家女試図会——後漢の曾大家の撰。

鄭氏女孝経図会——唐の^{ベツ}陳邈の妻鄭氏撰。

曾大家女論語図会——唐の宋若昭が名を漢の曾大家に託して撰。

明孝慈烈女伝図会——明の太宗皇帝の後馬氏撰。

79、^{テイキン}庭訓往来証注大成

1巻1冊。山崎美成刪補。嘉永4年(1852)刊。「庭訓往来」の注解書。

庭訓往来——僧玄惠作か。足利前期成か。1年12ヶ月の各月にそれぞれ進状、返状の一对ずつが配記せられており、更に閏8月の進状が加えられている。所謂往来物の代表的なものである。

80、箋註蒙求校本

3巻3冊。岡白駒箋註。明治17年(1884)刊。「蒙求」の注解書。

(注) 箋註一本文の意を解釈する

蒙求——3巻。唐の李瀚^{リカン}の著。書名は、易の蒙卦の「童蒙求我」の語をとり、童蒙初学者が経、史、子類中の故実を知るためのもので、上古から南北朝までの有名な人物の言行の美悪を取って、その事実が類似しているものを二つずつ配比し、4字句の韻語として記誦し易いようにした史的教訓歌である。

81、泰西 勸善訓蒙

3巻3冊。箕作麟祥訳。明治8年(1875)刊。原本はフランス国学士ボンヌ氏の著述で、1867年刊行。小学校で児童を教えるために作ったもの。

82、女大学通解

1巻1冊。内田節三編。大正2年(1913)刊。「女大学」の注解書。

女大学——倫理書で貝原益軒著といわれている。童子訓に似た内容形式をもった教訓的教科書である。江戸時代の女子教育並びに女性観を代表するもの。和順を根底として家政を治めることを主眼とする。

83、弘道館記述義

2巻2冊。藤田東湖述。明治16年版(1883)と慶応2年版(1866)との二組がある。景山公所撰の弘道館記を詳細に述義解釈したもの。

弘道館記——1巻。徳川斉昭著。天保9年(1839)成る。水戸の藩学弘道館の創立に当り、その建学の本旨を明示したもの。

84、西国立志編

8冊。中村正直訳。明治4年7月(1871)静岡で刊行。13編。10冊のうち11編より13編まで欠。原本は自助論(SELF-HELP)といい、英国スマイルズ著である。主として前人の行状が載せてある。

85、十訓抄詳解

1巻1冊。石橋尚宝著。明治34年(1901)刊。十訓抄を注解したもので、上巻だけがある。

十訓抄——説話集で3巻、建長4年(1252)成る。著書は諸説(橘成季、菅原為長、六波羅ニ藤左エ門入道等)があって一定しない。今昔物語、袋草紙、扶桑略記、三代実録、伊勢物語その他を出典として和漢の説話を集め、十條の教訓の下に分類してある。

86、実語教童子教

1冊。実語教、童子教をまとめたもの。

実語教——1巻。弘法大師作といわれ、成立年代も未詳である。経伝の格言または佛教の意にもとづいて作った昔の教訓書である。

87、(欠本)

88、伊勢二宮御き竹の辨

1巻1冊。本居宣長著。成立年代不詳。伊勢内宮外宮の御神体のことを論述したもの。

89、標註八宗綱要

2巻1冊。僧凝念著。元亀2年(1571)版。俱舎、成実、律、法相、三論、天台、華嚴、真言の八宗の大綱を敘述したもの。禅宗、浄土宗のことが簡単に附記してある。

90、(欠本)

91、信行策勵之研究

1 冊。中島観琇著。大正 9 年(1920)刊。佛書。一名浄土教要義という。浄土宗の教えを説いたもの。

9 2、^{サンジュカイベンヨウ}三聚戒辨要

1 卷 1 冊。^{フジャク}僧普寂著。明治 28 年(1895)刊。佛教の戒律中三聚浄戒の綱要を述べたもの。

三聚浄戒——^{フジャク}撰律儀戒（一切の諸悪を悉く断捨するもの）

^{フジャク}撰善法戒（一切の諸善を悉く実行するもの）

^{フジャク}撰衆生戒（一切の衆生を攝取して遍く利益を施すもの）

(注) ^{フジャク}僧普寂

伊勢の人、諸国を遍行し各宗を究め、宝暦 13 年(1763)江戸目黒の長泉院に^{フジャク}俱舎、唯識、華嚴、天台を講ずる。安永 10 年(1781)入寂。年 75。

9 3、通俗 大衆佛教問答

1 冊。前田慧雲編。明治 26 年(1893)刊。佛書。原本は佛通禅師が弘安 6 年(1283)にある禅尼の請に応じて述べたもので、現存のものは寛永 18 年(1641)の刊行である。上巻は天台の教理、下巻は真言禅宗について記述してある。これを増補し、その体を改めたのが本書であるが、上だけがあつて下はない。

9 4、佛遺教経論疏節要

2 卷 1 冊。著者未詳。(明) 万暦 40 年(1612)版。遺教経の注解書である。

遺教経——^{フジャク}釈尊入滅の時佛弟子のために遺誡せられたもの。

9 5、^{センジャク}選 択 本 願 念 佛 集

2 卷 2 冊。僧法然著。明治 21 年(1888)の序がある。佛書で、建久 9 年(1198)著者が籠居の際、九條兼実の請によって^{ヨウモン}要文（大切な文句）を記述したもので、浄土宗唯一の宝典である。

9 6、浄土宗名目問答

3 卷（上中下）1 冊。^{フジャク}僧辨阿著。佛書。別称「鎮西名目問答」「鎮西名目」「浄土名目問答」「三卷名目」。浄土宗鎮西派の教養の大要を論じたもの。

9 7、三卷書

1 冊。^{フジャク}僧弁長編。明治 14 年(1881)版。浄土宗五重相伝のうち三相伝を輯める。授手印、領解抄、論注がこれである。

(注) 五重相伝——浄土宗の鎮西、西山両派における秘密伝法の儀式で、^{フジャク}選 択 集、授手印、領解抄、決答疑問抄、論注の五書の中の要文を師が口ずから伝えること。

9 8、教誠律儀講述

2 卷 2 冊。^{フジャク}慧淑著。佛書。唐の南山の道宣律師の教誠律儀を漢文で講述したもの。

教誠律儀——^{フジャク}行相法ともいう。新学比丘の心得べき日常作法を律制に準して 23 法 466 條に分けて示したもの。

9 9、^{サイヨウ}西 要 鈔、^{ソウゴウ}父 子 相 迎

4 卷（各上下 2 卷）、1 冊。富田鳳瑞編。大正 4 年(1915)刊。

西要鈔——佛書で 3 卷、^{フジャク}僧向阿著。三部假名抄の一部として、著者が嵯峨清涼寺に参籠したときの修行者の法談を記したもの。

父子相迎——佛書で 2 卷、^{フジャク}僧向阿著。三部假名抄の一。娑婆と極楽との優劣を詳説し、浄土宗にいうところの「厭離穢土欣求浄土」の思想を説いたもの。

1 0 0、^{シモン}緇 門 崇 行 録（全）

1 卷 1 冊。^{フジャク}沙門株宏著。明治 13 年(1880)刊。高僧の言行を分類して記録したもの。

1 0 1、善光寺如来絵詞伝

4 卷（7 卷のうち前篇のみ。後篇 2 卷、附録 1 卷なし）4 冊。^{フジャク}僧已空纂述。弘化 4 年(1847)刊。善光寺如

来三国伝来の事蹟を因入りで説明したもの。

102、浄宗円頓菩薩戒誘蒙

1冊、僧観徹著。享保11年(1726)刊。円頓菩薩戒を衆生に弘通(ゴツツウ)(佛法をひろめる)するために録したものの。2組ある。

(注) 円頓菩薩戒——天台大師によって創唱せられ、天台宗その他に伝わる大乘の戒律である。

大乘は佛教中の高尚な理を説いたもので、慈悲、博愛の主義によって一切の衆生を救う義。乗は衆生をのせて彼岸に達する船の義。(小乗は卑近で凡夫に解し易い佛教)

戒律は僧尼の守るべき規則。

103、三心教訓抄

上下2巻、1冊。貞極上人説。門人某記録。元治元年(1864)刊。浄土宗の三心について述べたもの。

(注) 三心——ジンシン 深心(法を求める心が深重であること)

——エコウホツガンシン 回向発願心(自分が修じた功德を極楽浄土に回向して、佛国土に生れようと願う心)

——シンジョウシン 至誠心(真実で偽をはなれた心)

104、祐天大僧正利益記

3巻3冊。僧祐海著。僧祐善補。文化5年(1808)刊。祐天僧正のカンゲコウリョク 勸化功力に関する逸話四十七條を記す。

(注) 祐天僧正(名は愚心、正徳元年(1711)増上寺貫主に補せられる)

勸化(信者の喜捨をつのる)

功力(ききめ、てがら)

105、釈浄土二蔵頌義

30巻15冊。僧了誉著。寛永7年(1630)刊。別称「釈浄土二蔵義」「二蔵頌義」「頌義」。浄土宗鎮西派の教義を詳述したもの。

106、浄土略名目図

1巻1冊。源空上人説。聖覚法印記。了誉図。延宝6年(1673)版。浄土真宗の法門(佛法に入る道)、名目を一覧表様に図示したもの。

107、浄土略名目図見聞

2巻2冊。僧了誉著。延宝3年(1670)版。「浄土略名目図」の註解書である。

108、増補 古銭の話

1冊。好古齋道人編。大正5年(1916)刊。

109、赤穂四十七士伝

1巻2冊。青山延光著。文政12年(1829)刊。赤穂四十七士の各伝記を漢文で記したもの。

110、草偃和言

1冊。会沢安(水戸彰考館総裁)編述。昭和6年(1931)刊。もと天保5年(1834)の編述によるもので、礼典、故実等世教に関係のある事項を載録したものである。嘉永5年(1852)の上梓であるが、その後亡失が多いため再出版したもの。

111、千代田城大奥

2巻2冊。太田賛雄、永島今四郎共編。明治33年(1900)刊。上巻は年中行事、服装、女官職制、居住等について、下巻は大奥の内幕について記してある。(千代田城は江戸城の異称)

112、参考 吉野拾遺

1冊。小山多乎理校訂。明治30年(1897)刊。吉野拾遺の参考書である。

吉野拾遺——2巻本または3巻本、正平13年(1358)成る。藤原吉房作か。吉野朝廷を中心とした種々の説話、逸事を集める。《延元元年(1336)～正平13年(1358)》

113、蒙古寇紀

1 冊。長村鑒著。昭和 6 年(1931)刊。元寇弘安役六百五十年記念として同会の発刊によるもので、文化 13 年(1816)著者の序がある。原本はもと伯爵松浦厚氏所蔵の未刊本である。

1 1 4、泰西史鑑

5 卷 5 冊(上篇第 2 より第 6 までで、第 1 が欠本になっている。)西村茂樹訳。明治 2 年(1869)刊。西洋諸国の歴史の書を訳したもの。

1 1 5、漢韓史談

2 卷 2 冊。大槻如電編。明治 36 年(1903)刊。漢、韓両国の歴史から取材したので漢韓史談という。中学校漢文科用教科書として編纂したもの。

1 1 6、西南太平記

30 卷 30 冊。沼尻絰一郎著。明治 10 年(1877)刊。西南の紛起について記し、その間の事迹を明らかにしたものである。

1 1 7、新編日本略史

8 卷 8 冊。笠間益三著。明治 11(1878)版と同 14 年(1881)版の二組ある。著者の先著「日本略史」を更に詳しく改編したもので、神武天皇即位より明治 10 年までの歴史である。

1 1 8、日本略史字解

1 卷 1 冊。丹羽駒吉著。明治 10 年(1877)刊。前記「日本略史」に記された主な語句を天皇一代毎に区分して解説したものである。

1 1 9、標註国史纂論

10 卷 10 冊。山県禎著。土田泰蔵標註。明治 11 年(1878)刊。大日本史。羅山文集等二十八家三十四部の書により、神武天皇より後陽成天皇に至る史論の正確なものを収め、著者の評論を付したもの。

1 2 0、慶弘紀聞

10 卷 5 冊。安田照矩著。明治 4 年(1871)刊。後水尾天皇の慶長 5 年(1600)より孝明天皇の弘化 3 年(1846)に至る 13 代 247 年間の歴史である。一名十三朝紀聞という。附録に弘化 3 年より文久 2 年(1862)に至る記録(今日鈔)3 巻がある。

1 2 1、帝国史談

2 卷 2 冊。重野安繹著。明治 32 年(1899)刊。大槻磐溪の「近古史談」が織豊徳三世に限られているので更に範囲を広め、さしあたり鎌倉時代まで、将来は上世にまで溯って記述するもので、近古のみでないところから「帝国史談」と名づける。

1 2 2、保建大記

2 卷 1 冊。栗山愿著。正徳 6 年(1716)刊。雑記、保元元年(1156)より建久 3 年(1192)に至る後白河天皇より後鳥羽天皇まで六王三十八年間の史実を記し、その間の大義明文を明らかにしたもの。思想謹厳、神皇正統記につぎ、文章はそれを凌ぐといわれている。

1 2 3、補註神皇正統記

1 冊。大久保初雄補註。明治 33 年(1900)刊。神皇正統記の注解書。
神皇正統記——6 卷。北畠親房著。神代より後村上天皇までの歴史である。特に南朝正統論を真向にふりかざしたものであることで知られている。

1 2 4、訂正古訓古事記

3 卷 1 冊。本居宣長著。明治 8 年(1875)刊。寛永版及び度会延佳の鼈頭古事記がいずれも誤字、脱文、誤読が多いので、広く古事、古語に徴して更に校正したもの。

1 2 5、古事記伝

48 卷 48 冊。本居宣長著。天保 15 年(1844)刊。註釈書。別称記伝。古事記の註釈書として第一に推すべ

き著作で、古言、古意、古事を該博精密に明らかにすると共に、著者の古学の道を尽くしたものの。

古事記——我国最古の史籍。3巻。太安麻侶オオノヤスマロが勅を奉じて、稗田阿礼ヒエダノアレの口誦を筆記したもので和銅5年(712)に成る。寛永11年(1634)刊。一卷は天地開闢から鵜草葺不合命ウガヤフキアヘズノミコトまで、二巻は神武天皇から応神天皇まで、三巻は仁徳天皇から推古天皇にまで及び、神人歴代の神話、伝説を記す。

126、皇朝史略

12巻10冊。青山延宇著(水戸藩の文学者)。文政8年(1825)刊。神武天皇から後小松天皇までの漢文体の歴史。大日本史を簡単にしたもので史論がつけてある。また、別に上・下2巻本もある。

127、統皇朝史略

5巻5冊。青山延宇著。天保3年(1832)刊。前述の皇朝史略に続き、称光天皇より後陽成天皇までの歴史書である。また別に5巻1冊本もある。

128、国史略

5巻5冊。岩垣松苗著。文政9年(1826)版と明治6年(1873)版との二組ある。十八史略に倣って記した神代から後陽成天皇までの歴史書である。

129、増補日本政記

16巻8冊。頼襄著。明治23年(1890)刊。神武天皇から後陽成天皇までの編年史である。御一代毎に本紀をたてて史実を掲げ、自家の論断を付記したもの。

(注) 編年史——年代順に事実を記述した歴史。

本紀——紀伝体の歴史で帝王のことを記した部分。

紀伝体——歴史の一体で、本紀、列伝の体裁によって、人物を中心として記述したもの。

130、校刻日本外史

22巻12冊。頼襄著。安岡元吉校。元治元年(1864)刊。日本武家の歴史である。源氏、新田氏、足利氏、徳川氏の四氏を大綱とし、その間に平氏、北條氏、楠氏、後北條氏、武田氏、上杉氏、毛利氏、織田氏、豊臣氏をのせて、著者自ら司馬遷の史記の世家セイヤカに倣って著述したといっている。

(注) 世家——史記に諸侯王のことを記したものをいう。

131、校正標註日本外史

22巻13冊。頼又二郎(山陽の第二子で三樹三郎の兄、又二郎は通称)標註。明治23年(1890)刊。日本外史の注解書である。

132、増補日本外史

22巻12冊。頼又二郎増補。明治18(1885)刊。日本外史の注解参考書である。

133、古史伝

32巻26冊。平田篤胤著。明治8年(1875)刊。宣長の記伝にならい先著「古史成文」の各段につき詳細に注釈し、古代を明らかにし、古道を究めようとしたもの。

134、大日本史

243巻(別に序、目3巻)100冊。徳川光圀監修。嘉永4年(1849)版。神武天皇から後小松天皇までの歴史を記したもの。巻1～巻73(帝王本紀)、巻74～巻85(后妃列伝)、巻100～巻105(皇女列伝)、巻106～巻178(諸臣列伝)、巻179～巻186(將軍列伝)、巻187～巻191(將軍家族列伝)、巻192～巻213(將軍家臣列伝)、巻214～218(文学列伝)、巻219～222(歌人列伝)、巻223(孝子列伝)、巻224(義烈列伝)、巻225(烈女列伝)、巻226(隱逸列伝)、巻227(方枝列伝)、巻228～巻230(叛臣列伝)、巻231(逆臣列伝)、巻232～243(外国列伝)。

後、志126巻、表28巻が続々発行せられた。

135、東鑑(新刊吾妻鏡)

52巻22冊。寛文元年(1661)版。鎌倉幕府の日記で、源頼朝が伊豆に兵を起こしてから、その子頼家、

弟実朝、藤原頼経、頼嗣を経て、宗尊親王までの将軍 6 代 87 年間の記録である。作者詳でない。

1 3 6、故実叢書 大内裡図考証

14 冊。今泉定介編。明治 35 年(1902)刊。原本は裏松光世著。内藤広前補正。大内裏の殿舎、門閤及び調度等について、古書を採録し、切図を載せ、精細に調査したもの。天明 8 年(1788)に 30 年を費やして成った。

1 3 7、(欠本)

1 3 8、故実叢書 輿車図考

1 冊。今泉定介編。明治 35 年(1902)刊。原本は 1 巻。松平定信著。輿車(乗物)の考証及び図録である。文化元年(1804)の自序がある。

1 3 9、故実叢書 輿車図考附図

2 冊。今泉定介編。明治 33 年(1900)刊。

1 4 0、故実叢書 本朝軍器考

1 冊。今泉定介編。明治 32 年(1899)刊。原本は 12 巻。新井君美著。元文元年(1736)刊。我が国の武器に関する制度。沿革等神代より江戸時代にわたって、12 種、151 條に総括的叙述を試みた点は、実に武家故実書の最初である。

1 4 1、故実叢書 軍用記

1 冊。今泉定介編。明治 33 年(1900)刊。原本は 7 巻。伊勢貞丈著。天保 14 年(1843)刊。軍陣の作法、故実を詳述し図説したもの。鎧下小袖より甲冑、刀劍、弓矢、軍礼、首実検等に至るまで記してある。

1 4 2、故実叢書 尚古鎧色一覽

1 冊。今泉定介編。明治 34 年(1901)刊。原本は 2 巻、本間游清著。天保 4 年(1833)刊。旧記、物語等に見えた鎧威毛色目 262 種を部類別にあつめて図説したもの。

1 4 3、故実叢書 服色図解

1 冊。今泉定介編。明治 35(1902)刊。原本は 2 巻。本間百里著。文化 13 年(1816)刊。装束及び装束の具の着色図に解説を施したもの。

1 4 4、故実叢書 鎧着用次第

1 冊。今泉定介編。明治 34 年(1901)刊。原本は 1 帖。伊勢貞丈著。鎧着用の順序次第を画いた彩色図である。

1 4 5、故実叢書 冠帽図会

1 帖。今泉定介編。明治 32 年(1899)刊。原本は 1 帖。松岡辰方著。各種冠帽 36 種の図帖である。文化 3 年(1806)著。天保 11 年(1840)刊。

1 4 6、資治通鑑

294 巻。148 冊。(宋)司馬光撰。天保 7 年(1836)刊。周の威烈王 23 年(前 403)から後周の世宗顯徳 6 年(959)まで 1362 年間の通史である。宋の英宗の治平 2 年(1065)から、神宗の元豊 7 年(1084)までの 19 年を費やして成ったもの。2 組あるが、内 1 組は欠本がある。

はじめ「通志」と名づけられたが、宋の神宗が「資治通鑑」という名を与えた。これは、歴代の事蹟を明らかにして、治世上有力な参考資料をすることができるという意味からである。

政治上の利害得失並びに人物の性行について鑑戒となるべき事蹟を多くのせているが、制度や地理の説明に関してもまた細やかな注意を拂っている。

1 4 7、通鑑肇要

37 巻 15 冊。(清)姚培謙。張景星共輯。増田貢校点。明治 9 年(1876)刊。「通鑑」の大要を把握したという意味で書名としたもの。前編(盤古氏より周考王の 15 年(前 426)まで)、正編(周威烈王の 23 年(前 403)より周世宗の顯徳 6 年(959)まで)、続編(宗太祖の建隆元年(960)より元順帝の至正 27 年

(1367)まで)、明史(太祖の洪武元年(1368)より毅宗の崇禎17年(1644)まで)。編年体に極めて簡潔に記述してある。

148、通鑑綱目

59巻80冊。(宋)朱熹撰。正しくは「資治通鑑綱目」という。資治通鑑により、眼目となるべき事項を大書して綱とし、各項に分注して目としたものである。目は門人趙師淵チョウシエンの手に成ったもの。わが国では慶安4年(1651)鶴飼鍊斎がこれを校点して刊行した。

149、通鑑綱目前編

25巻10冊。(明)陳仁錫チンジンシヤク(セキ)評閱。伏羲氏より周威烈王の23年(前403)までの通史である。即ち前記通鑑綱目の前編である。

150、続通鑑綱目

27巻30冊。(明)商輅ショウロク等撰。(明)陳仁錫評閱。宋の太祖建隆元年(960)に始まり、元の順帝至元27年(1341)に至る。

151、歴史綱鑑補

39巻20冊。(明)袁黃エンコウ撰。寛文3年(1663)刊。資治通鑑以下の諸書を合併して互に補綴したもの。

152、綱鑑全史(歴朝綱鑑全史)

70巻24冊。湯睡菴撰。前記歴史綱鑑補と同様であるが更に陳眉公の註釈を施したもの。

153、史記

130巻22冊。(前漢)司馬遷撰。黄帝から前漢の武帝までの3000余年間の歴史を紀伝体に編述したもの。宋、太宗の淳化5年(994)に始めて刊行。

154、史記評林

130巻50冊。(明)凌稚隆撰。寛永13年(1636)刊。史記の注解参考書である。

155、新刻校正 史記評林

132巻50冊。(明)凌稚隆リョウシロウ輯校。李光縉リコウシン増補。寛政4年(1792)刊。132巻は序・目録1巻。読史総評1巻を含めての巻数である。

156、校正再版 史記評林

130巻(外に序、目録など1巻)25冊。著者は前記に同じ。天明9年(1789)刊。

157、史記ケイ鱧

10巻5冊。岡白駒著。寛政5年(1793)刊。史記の難句をあげて摘解したものである。

158、漢書

100巻34冊。(後漢)班固撰。明、崇禎15年(1641)の刻印がある。原本は100巻であるが、後その長篇を分けて115巻とし、更に120巻とした。これが現行本である。前漢書または西漢書ともいう。前漢12帝・230年間の歴史である。

159、漢書評林

100巻50冊。(唐)顔師古注。(明)凌稚隆評林。明暦3年(1657)刊。前記漢書の注解参考書である。

160、後漢書

120巻24冊。(宋)范曄ハンヨウ撰。明の崇禎16年(1642)の刻印がある。漢書が前漢のことを記したのに対して、本書は紀伝体で、後漢20帝のことを記したもの。現行本は宋の眞宗元年(998)11月刊のものである。

161、五代史

75巻10冊。(宋)歐陽修撰。明の崇禎3年(1629)の刻印がある。梁・唐・晋・漢・周5代の歴史である。新旧の二種がある。本書はその新で、正しくは新五代史という。主として旧五代史に基づいて撰したものである。旧五代史は宋の薛居正セツキョウセイが勅を奉じて撰したもので、宋の太祖開宝7年(974)10月に成る。

162、北齊書

50 卷 6 冊。(唐) ^{リヒョクヤク}李百薬撰。明、崇禎 11 年(1637)の刻印がある。本紀 8、列伝 42 より成る。

1 6 3、周書

50 卷 7 冊。(唐) ^{トクフン}徳荼撰。明の崇禎 5 年(1631)の刻印がある。周は北周である。故に北周書または後周書ともいう。本紀 8、列伝 42 である。

1 6 4、晋書

130 卷 33 冊。(唐) 房玄齡。李延寿勅撰。明の崇禎元年(1627)の刻印がある。西晋 4 代 54 年、東晋 11 代 102 年間のことを記したものの。

1 6 5、魏書

114 卷 32 冊。(北齐) 魏収等撰。明の崇禎 9 年(1635)の刻印がある。魏の歴史を本紀、列伝、志などに分けて編年体に記述したもの。書中に釈老(釈迦と老子)があるのが本書の特色である。

1 6 6、唐書

225 卷 60 冊。(宋) 欧陽修。宋祁撰。明、崇禎 2 年(1628)の刻印がある。新旧に二種あるが本書は新で、旧唐書を改修したもの。宋嘉祐 5 年(1060)に成る。

1 6 7、隋書

10 卷 2 冊あるのみで、大部分が欠本。(全部で 85 卷ある)(唐) 魏徵等撰。隋代の歴史で、唐の貞観 10 年(636)に成る。帝紀 5 卷、志 30 卷、列伝 50 卷。

1 6 8、梁書

56 卷のうち 7 卷 1 冊(5 卷～11 卷)あるのみ。(唐) ^{ヨウシレン}姚思廉撰。本紀 6 卷、列伝 50 卷。

1 6 9、南史

80 卷 20 冊。(唐) 李延寿撰。明の崇禎 13 年(1639)の刻印がある。南朝 4 代、宋・齊・梁・陳 170 年間の事蹟を記したもの。本紀 10 卷、列伝 70 卷。

1 7 0、北史

100 卷 31 冊。(唐) 李延寿撰。明の崇禎 12 年(1638)の刻印がある。北朝の魏より隋に至る 4 代 242 年間の歴史である。本紀 12 卷、列伝 88 卷。

1 7 1、陳書

36 卷 5 冊。(唐) 李延寿撰。明の崇禎 4 年(1630)の刻印がある。南朝の陳の歴史である。本紀 6 卷、列伝 30 卷。宋、仁宗の嘉祐 6 年(1061)、版に付した。

1 7 2、南齊書

59 卷のうち 47 卷、9 冊である。(44 卷-51 卷、56 卷-59 卷欠)。南北朝時代の南齊の正史。本紀 8 卷。志 11 卷。列伝 40 卷。(梁) ^{ショウシケン}蕭子顯撰。明の崇禎 10 年(1636)の刻印がある。

1 7 3、三国誌

65 卷 13 冊。(晋) 陳寿撰。明の崇禎 17 年(1643)の刻印がある。呉・魏・蜀の三国の歴史である。

1 7 4、宋書

100 卷 24 冊。(梁) ^{シンヤク}沈約撰。明の崇禎 7 年(1633)の刻印がある。劉宋(南北朝時代、劉裕が晋の禪讓を受けて建てた国)の歴史である。

1 7 5、新刻校正 十八史略

7 卷 7 冊。巖垣龍溪校訂補註。天明 5 年(1785)刊のもの、文政元年(1818)刊のものとの二組がある。十八史略の注解参考書である。

十八史略——2 卷。後明の陳殷が音積をつけて 7 卷とした。元の曾先之撰で、史記、前漢書、後漢書、三国志、晋書、宋書、南齊書、梁書、陳書、北魏書、北齊書、周書、南史、北史、隋書、唐書、五代史、宋史の十八史書の事実を鈔略し、時代を追って編んだもの。

1 7 6、増補改訂 十八史略訓蒙

7 卷 5 冊。長瀬寛二編。明治 17 年(1884)刊。

1 7 7、標註十八史略校本

7 卷 7 冊。関徳標註。明治 17 年(1884)刊。

1 7 8、増注十八史略定本

7 卷 7 冊。藤沢南岳増注。明治 19 年(1886)刊。

1 7 9、標記増補十八史畧

7 卷 7 冊。巖垣龍溪標記。岩垣東園再校増補。明治 3 年(1870)刊のものと、明治 16 年(1883)刊のものとの二組がある。

1 8 0、増補元明史略

4 卷 4 冊。後藤世鈞編次。藤原正臣増補。文化元年(1804)刊。元、明 2 代の歴史を漢文で記し、曾先之の十八史略の続編にしようとしたもの。

1 8 1、大明一統志

90 卷 60 冊。(明) 李賢等撰。正徳 3 年(1713)刊。京師、南京、中都、興都の四大門に分け、都ごとにその地理をかき、府についての沿革、人物などを詳細に記述してある。

1 8 2、(欠本)

1 8 3、折たく柴の記

3 卷 5 冊。谷口行元写本。文政 3 年(1820)筆。原本は新井白石著。著者の自伝で、享保元年(1716)將軍家宣の 5 回忌に筆を起し、父母の事より自らの半世を回顧したもので、文章が非常に力強く、近世に成った假名交り文の模範とされている。

1 8 4、校正 標註折たく柴の記

1 冊。内藤耻叟標註校正。明治 32 年(1899)刊。前記「折たく柴の記」の注解参考書である。

1 8 5、日本智囊

6 卷 3 冊。中村和周著。明治 18 年(1886)刊。賢君、名子の事蹟中、智略に関するものを上智、明智等十項目に分けて輯録したもの。

1 8 6、輿図要覽

4 卷 4 冊。写本で生年月日、著者など不詳である。中国、朝鮮、蒙古方面の地図で始めに図をのせ、次に詳しく説明してある。

輿地の説明に「東起朝鮮西至嘉峪^{カヨク}南濱海北連沙漠道路縈^{エイウ}紆各万余里」とある。

(注) 嘉峪——嘉峪関は漢に入る門戸で、甘肅省にある。 縈紆——めぐりまつわる。

1 8 7、列仙全伝

9 卷 4 冊。(明) 王世貞輯次。慶安 3 年(1650)刊。中国における仙人 581 人について記述したもの。

1 8 8、名臣言行録

前篇 10 卷 3 冊、後篇 14 卷 3 冊。(宋) 朱熹撰。寛文 7 年(1667)刊。宋代の名臣の言行録で、前記以外に続集 8 卷、別集 26 卷、外集 17 卷がある。

1 8 9、靖猷遺言^{セイケンイゲン}

8 卷 3 冊。浅見安正編。明治 13 年(1880)刊。原本は 2 卷。支那の屈原、孔明、陶淵明、顔眞卿、謝暈山、方孝孺等忠臣義節の人の遺文を撰集し、各々小伝をつけたもので、以て大義奉公の精神を鼓吹したものである。

1 9 0、富田高慶翁伝

1 冊。大槻吉直著。明治 30 年(1897)刊。富田高慶字は弘道、任齋と号する。奥州宇多郡中村の藩士齋藤嘉隆の次子で、文化 11 年 6 月 1 日生れ。二宮尊徳に師事し、藩の荒廢困窮を救った。(福島県)

191、河村瑞賢伝

1冊。国立正呉編。昭和9年(1934)刊。瑞賢はその号で、初名は七兵衛、後十右衛門と改めた。元和4年(1618)に生れ、元禄13年(1700)江戸に歿した。年83、鎌倉建長寺に葬る。勢州より、江戸に出て成功し、後幕府に仕えて奥羽、江戸間その他の海運を開いて業績をあげた。明治44年6月正五位を贈られた。

編者は建長寺内正統院住職である。

192、西洋紀行 航海新説

2冊。中村桜洲著。明治2年(1869)刊。著者が西洋諸国を巡航したことについて、航海を主にした紀行文を日記の形で記したもの。

193、日本国^{クニツクシ}尽

8巻8冊のうち7巻7冊。(第6、山陽道欠)瓜生三寅著。明治5年(1872)刊。地理書で、総論、畿内五国、東海道、東山道、北海道、北陸道、山陽道、南海道、西海道に分けて説明してある。

194、辺要分界図考

7巻8冊。近藤守重輯。文化元年(1804)刊。写本である。我が北辺の地理に関して図考したもの。

195、官許 輿地誌署

12巻のうち11巻(第11の下巻欠)、11冊。内田正雄等訳。明治10年(1877)刊。マッケイ・ゴールドミス・カラームルス各氏の地理書によって抄訳した世界地理書である。

196、都名所図会

6巻6冊。秋里湘夕著。安永9年(1780)刊。京都の名所旧蹟地誌である。図は春秋斎信繁の筆。外に6巻2冊のものがもう一組ある。

197、大和名所図会

6巻7冊。秋里湘夕著。寛政3年(1791)刊。大和国の名所旧蹟を図説した地誌である。図は春朝斎竹原信繁の筆。

198、(欠本)

199、摂津名所図会

9巻12冊。秋里湘夕著。寛政10年(1798)刊。摂津国一円の名所。旧蹟、史実を図し、解説を加えたもの。図は竹原信繁以下7人の画工による。

200、西洋事情

初篇3巻、二篇4巻、外篇3巻10冊。同じものが三組ある。福沢諭吉著。初篇及び二篇は明治3年版(1870)、外篇は慶応3年版(1867)。著者が外遊の際見聞したことを基礎として、欧米諸国の制度、文物等を細説紹介したもの。

201、政治略原

2巻2冊。何礼之訳。明治5年(1872)刊。原本は政学入門書とあって、アメリカの政学家ヨング氏著。政学の原理・アメリカ聯合諸邦の体裁について記述してある。

202、^{リョウノギダ}令 義解

10巻1冊。清原夏野等勅撰。寛政12年(1800)刊。大宝令の官撰註釈書。令の施行に際し、語句、法文等の解釈に関していろいろ疑義がおこり、諸学者の意見もまちまちであったので、清原夏野以下数名のものに命じて審議せしめて、政府が準拠すべき註釈書としたものである。

203、増補職原名目鈔

1冊。織田甚内増補。写本である。(本館所蔵のもの)。職原名目鈔を増補したもの。標註職原鈔校本。百寮訓要鈔。本朝官職備考杯による名目を撰出して、初学者の便に供したものである。

(注)百寮訓要鈔——二條良基著。一卷。官職のことを假名文で略記したもの。慶安2年(1649)刊行。

(参考) 官職備考——7 卷。三宅帯刀著。元祿 8 年(1695)刊。官職の起原沿革を記したものの。

204、標註職原抄校本

4 卷 2 冊。近藤芳樹標註校本。安政 5 年(1858)刊。職原抄の参考注解書である。

職原抄——2 卷。北畠親房著。官位鈔・明職の別名がある。官職の沿革、補任の次第を漢文で記した書である。興国 2 年 2 月(1341)小田城(常陸国)中で作ったもので、慶長 13 年(1608)中原職忠が刊行して初めて世に出た。

205、錦森新刻 御成敗貞永式目

1 冊。東京。錦森堂編。文政 10 年(1827)刊。御成敗式目は、鎌倉幕府が貞永元年(1232)5 月に諸條目の起草を評定衆三善康連に囑し、法橋円全が執筆して 8 月 10 日 51 ヶ條を脱稿したものである。貞永式目ともいう。

206、日本制度通

3 卷 3 冊。萩野由之。小中村義象共著。明治 32 年(1899)刊。有史以来を五期に分け、我国の諸制度について説明したもの。

(注) 五期の区分——太古(紀元以前) 上古(紀元元年より皇極天皇の 3 年まで 1304 年間) 中古(大化元年～安徳天皇寿永 4 年 541 年間) 近世(後鳥羽天皇文治 2 年～孝明天皇慶応 3 年 682 年間) 今代(明治元年以降)

207、延喜式

50 卷 15 冊。藤原時平。忠平等撰。禁中の儀式、百官の作法、その他諸国の恒例を詳記した書で、延喜 5 年の勅により撰じたからこの名がある。延長 5 年(927)に奉ったもので、弘仁、貞観年間の撰進のものと一緒に三代式という。

208、文献通考^{ソコウ}

348 卷 120 冊。(元)馬端臨撰。明の嘉靖 3 年(1524)版。杜佑の通典により、更に増補して 24 門とし、各門を更に数目に分けて、宗代の制度をも詳細に述べたものである。

(注) 通典——通は歴代を通ずる意。典は書の義。唐虞(堯及び舜)から唐の天宝(742～755)までの歴代政教の記録を部門に分けて(8 部門) 掲載したもの。唐の杜佑撰である。

209、続文献通考

254 卷 120 冊。(清)稽澣^{ケイコウ}等勅撰。清の乾隆 12 年(1747)版か、宋、遼、金、元、明、5 朝の事迹を記したもの。清の康熙年間の勅撰である。

210、武学拾粹

8 卷 8 冊。星野常富編。嘉永 6 年(1853)刊。武学に関して土操、要器、帯甲、陣營、成功、探候、用馬の 7 篇に分けて詳述したもの。

211、類聚三代格^{キョウ}

15 卷 16 冊。30 卷であったが散佚して 15 卷となった。弘仁、貞観、延喜三代の格を、内容によって神社以下数十次に分けて記述したものである。15 卷中 9 卷は弘化 2 年(1845)校刻。6 卷は明治 17 年に補った。

(注) 格——律令発行の後、詔書や官符で、律令の定法を改めたり、または臨時の新制を設けたりしたものを集めたものをいう。

212、万国公法

4 卷 6 冊。丁韞良(アメリカの教師)訳。元治元年(1864)版。アメリカ^{ヘートン}惠頓氏原著のものを漢文に訳したものである。

213、万国公法訳義

4 卷 4 冊。堤穀士志訳。慶応 4 年(1868)刊。アメリカ惠頓氏原著のものを訳したものである。

2 1 4、真政大意

2 卷 2 冊。加藤弘之講述。明治 3 年(1870)刊。著者が立憲政体の国々の施設の概略を講述したものを、そのまま上梓したものである。

2 1 5、格物入門

7 卷 7 冊。丁躉良撰著。本山漸吉訓点。明治 2 年(1869)刊。格物学とは理科学のことをいう。

2 1 6、気海観瀾広義

12 卷 5 冊。川本幸民訳。安政 2 年(1855)刊。著者の先父著「気海観瀾」の余義を拡め、足りないところを補ったもの。

気海観瀾——天地万物の理をきわめる所謂理学全般について概説したもの。

2 1 7、増補 数学三千題解式 (全)

1 冊。尾関正求著。明治 23 年(1890)刊。先著「数学三千題」の解式である。数学三千題は下巻のみあり。

2 1 8、地学教授本

6 卷 6 冊。内田正雄遺稿。三橋惇纂訳。明治 11 年(1878)刊。世界地理書。(米)ゼームス、クルイクシャンク氏の小学地理書によるかたわら(英)マッケー氏の地誌を参考にして、年少者を教えるために作ったもの。

2 1 9、博物新編

3 卷 3 冊。英国医士合信著。元治元年(1864)刊。第一集には地気論、熱論、水質論、光論、電気論、第二集には鳥獸略論、猴類(さる)、象論、犀論、虎類論(獅子を含む)、^{チジュウ}齧獸論(牛の類)、胎生魚論、鷹類論、無翼禽類等に分けて述べる。

2 2 0、虎烈刺論

1 冊。石黒忠憲訳。明治 4 年(1871)刊。虎烈刺 正しくは虎列刺(コレラ)と書く。虎列刺病について論じたもの。二三の西書(医学書)を訳してまとめたものである。

2 2 1、試薬用法

2 卷 2 冊。(独)フレセニユス著。三崎尚之訳。明治 3 年(1870)刊。化学書。化学薬品の性質、用途、使用法などについて述べたもの。

2 2 2、新訂増補 和蘭薬鏡

18 卷 18 冊。宇田川玄眞著。文政 11 年(1828)刊。先著「和蘭薬鏡」から、みぢかな必要なものだけを採り、更に遠西名医の諸説を増補したもの。

2 2 3、救荒本草

16 卷 8 冊。周定王著。(明)嘉靖 7 年(1528)版。救荒はききんの苦難を救うこと。本草は植物の意である。

2 2 4、運用術教科書図

1 冊。股野三蔵翻刻。明治 35 年(1902)刊。航海船の部分や全体を図解し、航海術の便に供したもの。

2 2 5、西洋水利新説

2 卷 2 冊。谷山儀一訳。明治 5 年(1872)刊。^{ラウトン}羅当氏の「農業集成字書」により、傍らデンプシー、ウェーリング両氏の疏通新篇。同得失論の二書を参訳し、その不足を補うたもの。原本は疏通、堤防、引漑の三篇に分かれているが、全部水利に関係しているので、これを合せて水利新説と名づけた。

2 2 6、泰西農学

6 卷 6 冊。緒方儀一訳。明治 3 年(1870)刊。原本は英国のゾーマス、シフレッチェル氏の著書である。

2 2 7、西洋開拓新説

2 卷 2 冊。緒方正訳。明治 3 年(1870)刊。英ラウトン氏の「農業集成韻府」を抄訳し、足りないところ

ろはスチーブンス氏の農業書を参訳して補ったもので、農地の開拓に関することを記す。

2 2 8、培養秘録

6 卷 4 冊。佐藤玄明口授。佐藤信淵筆記。明治 6 年(1873)刊。肥料の配合、製法、使用法などについて口授したものを記録したもの。

2 2 9、古今支那書画名家詳伝

21 卷 13 冊。近藤元粹著。大正 7 年(1918)刊。巻 1 には上古から唐床まで、巻 2～巻 17 には明人、巻 18 以下には清人を述べる。

2 3 0、三体千字文

2 卷 2 冊、日下鳴鶴書、明治 31 年(1898)刊。1 冊、村田海石書、明治 36 年(1903)刊。1 冊、吉田雪洲書、明治 34 年(1901)刊。三種がある。

2 3 1、山水花鳥 早引漫画

3 卷 3 冊。(1 卷 1 冊欠) 安達唵光著。明治 14 年(1881)刊。

2 3 2、西画指南

2 卷 2 冊。川上寛著。明治 4 年(1871)刊。前編(下) 1 冊のみ。

2 3 3、新古刀剣 目利早わか利

1 冊。本阿彌光遜著。大正 7 年(1918)刊。

2 3 4、絵入 智慧の環

8 卷 4 冊。古川正雄著。明治 3 年(1870)刊。国語の基礎になることば、国内の地名、名所等について図説したもの。他に、二編(上)、1 冊あり。

2 3 5、篆書字引

1 冊。一峯先生撰。明治 43 年(1910)刊。

2 3 6、廣益字林大成

5 卷 5 冊。赤沢常道編。明治 10 年(1877)刊。字彙、字典、玉篇等の諸書によって、音訓、韻字及び古文、籀文(大篆のこと)、俗字、偽字の同異、舛誤(あやまり)を校訂し、四書、五経、老子、莊子、説文等の出処を参考し、毎画の下に編録したものである。5 冊のうち 4 巻目 1 冊を欠く。

2 3 7、首書訓蒙 日本政記字引

2 卷 2 冊。高橋四郎編。明治 10 年(1877)刊。日本政記中の難語句を天皇別に区分して音訓を詳かにしたもの。

2 3 8、国語かなつかい

1 冊。石田道三郎著。明治 26 年(1893)刊。かなづかいを分けて、清音、濁音、音便、字音の假名の四種とし、そのうち前三者について説明したもの。

2 3 9、字音假字つかい

1 冊。深井鑑一郎著。明治 27 年(1894)刊。特に漢音と呉音について述べてある。

2 4 0、字音か那津可ひ

1 卷 1 冊。本居宣長著。安永 5 年(1772)版。「お・を」の所属を詳細に辨明したところに特色があり、著者の卓見がうかがわれる。

2 4 1、康熙字典

42 卷 40 冊。(清) 張玉書、陳廷敬等撰。清の康熙 49 年(1710)に勅を奉じて撰し、同 55 年(1716)に刊行。道光 7 年(1827)に重修。

2 4 2、訓蒙 康熙字典

1 冊。長谷川政忠編。大正元年(1912)刊。康熙字典を訂正増補し、携帯に便ならしめたもの。

243、明治玉篇大全

1冊。後藤光憲編。明治41年(1908)刊。画引字書である。

(参考) 玉篇——画引字書で、梁の大同9年(543)顧野王の撰するところ。後唐の上元元年(760)に孫彊が増補し、また宋の陳彭年等が重修した。(542部、299070言) 我国で初めての開板は慶長9年(1604)で、遂には和訓をつけて行われた。こうして玉篇とは普通漢字引の意味に用いられるようになった。

244、開化新增 大全早引節用集

1冊。丹羽駒吉編。明治24年(1891)刊。辞書。「早引節用集」中、特に卑陋(いよいよ)な俗語を省き、音訓を正して編輯したもの。

早引節用集——1巻。鈴木徳之助著。天保14年(1843)刊。吾が雅俗(雅言、俗言)の熟語を、いろは順に列挙して左右に音訓を付記したもの。

245、増補雅言集覽

26巻(44巻のうち)、26冊(44冊のうち)、石川雅望集、中島広足補、文政9年(1826)刊。「雅言集覽」を増補したもの。

備考——26巻は第2巻より27巻までのもの。

雅言集覽——石川雅望作 本邦古来の書により、あらゆる雅言を抜き出して悉くいろは順に配列し、各語とも歌文を引いて説明したもの。

246、増注校正 頭書字彙

15巻15冊。関室増注。天明7年(1787)刊。15巻は12集、首末2巻、補遺1巻からできている。明の梅膺祚撰の「字彙」(12集、首末2巻)を増註したもの。

字彙——前に梅鼎祚の序。次に凡例及び目録、次に首巻と末巻がある。十二支で各集に題し、一画から十七画まで二百十四部とし、総字数は三万三千一百七十九字である。

247、詞の玉の緒

6巻7冊。本居宣長著。明治19年(1886)刊。原書は安永8年(1779)刊で、国語の「てにをは」について、その性質、用法等が詳しく説明してある。

248、かざし抄

3巻3冊。富士谷成章著。明和4年(1767)に成る。刊年は不明である。日本語の品詞を名・装・脚結・挿頭の四種とした著書が、挿頭(今の感動詞・代名詞・副詞・接続詞・接頭など)約96種、220余語を五十音順に列ね、古歌を引用して、各語の意味・用法を説いたもの。

249、あゆひ抄(あゆいしょう)

5巻6冊。富士谷成章著。安永7年(1778)版。助動詞、てにをはの整然と分類された最初のものである。後世文典の分類秩序の基をなしている。

(注) 名は今の体言、装は用言に当る。また脚結は大体において助動詞とてにをはに当る

250、文語碎錦

4巻2冊。

原本は文語粹金と書く。4巻で鈴木政寧著。弘化4年(1847)刊。記游、記事、記戦、題跋等に分類して、漢語を輯めたもの。2組ある。

251、消息文例

2巻2冊。藤井高尚撰。明治26年(1893)刊。擬古文の手紙の書きようを記したもので、上巻は、むかしの「せうそこ」文のさた、他15箇條の消息文範の変遷並びに考証、下巻は、連語、単語の用法を源氏その他の古典より例証し、近世語と中古語を比較して述べる、本居宣長の序がある。

252、^{ガダン}雅言童諭

1冊。河崎清厚著。天保15年(1844)刊。雅言をいろは順に排列して、注釈を施したもの。語数3418、高橋知周の序がある。

253、^{イジュン}子語彙雋

1冊。渡辺碩也編集、明治13年(1880)刊。孔子^{ケイゴ}家語、老子、莊子、列子、管子等よりすぐれた語句を選出したもの。

(注) 孔子家語——16巻、孔子の言行、門人の門答論議の語を録したもの。家語というのは、孔子一家(一門)中の語という意味であろう。

254、書簡文範

2巻2冊。阿保友一郎、国府佐七郎共編。明治31年(1898)刊。日常に起る適切な文例150余を撰び、文字は平易なもの2300余を使用する。また別に100余の文題を集めて練習用としてある。

255、本朝文範

3巻3冊。稲垣千穎、松岡太愿共編。明治15年(1882)刊。寛平、延喜(889~922)の頃以後のものを、辞類、序類、記類、論類、評類、説類、辯類、教諭類、訓誡類、消息類に分けて文例を記したもの。

256、習文軌範

8冊。秋月誠一纂。明治12年刊(1879)。記、説、論、序、跋の部に分けて8巻に文例を記し、每部巻末に語句の解説が附録してある。

257、正文章軌範纂評

7巻3冊。近藤瓶城纂評。明治26年(1893)刊。文章軌範の註解。参考書である。

文章軌範——7巻。宋^{シヤボウトク}の謝枋得撰。科挙(昔の官吏採用試験)に応ずるものの為に撰したもの。韓愈、柳宗元、杜牧などの作69篇を撰び、一、二巻を放膽文、三巻以下を小心文とする。

(注) 放膽文——思った通りを自由に大胆に述べる文。

小心文——語句を注意して洗練し、筆法を婉曲にした文。

文章軌範続編——書肆が名を鄒東郭に假って、続編7巻を撰し、先秦から明初までの諸家の文を収めたもの。

258、校刻補訂 文章軌範評林

7巻3冊。伊東亀年補訂。文政4年(1821)刊。

259、新点 正文章軌範撮要

1冊。桑原俊郎編次。明治35年(1902)刊。

260、続文章軌範纂評

7巻3冊。近藤瓶城纂評。明治26年(1893)刊。

261、校刻補訂 続文章軌範評林

7巻3冊。伊東亀年補訂。文政4年(1821)刊。

262、増訂続文章軌範講義

7巻1冊。興文社編。大正6年(1917)刊。

263、^{ハイブンインフ}佩文韻府

106巻7冊。(清)張玉書。陳廷敬等撰。明治41年(1908)刊。佩文齊韻府ともいう。清の聖祖皇帝の勅を奉じて撰したもの。韻府群玉、五車韻瑞等に採ったものは韻藻といって前に列し、両書に採らなかつたものは「増」の字をつけて後に列してある。康熙43年(1704)6月に始め、同50年10月にできあがった。実に106巻、18000余頁の大部に上った。佩とは、「倍」で増益の意である。従前の韻書は大抵簡略疎漏で誤謬も多いので、典籍をあつめて訂正、増益して編成したことから名づけられたものである。乾隆の時に改められて444巻となった。

(注) 韻府群玉——20 卷。元の陰時夫の撰。その兄、陰中夫注。現存の韻書で最も古いものである。今世通行するところの韻は、皆この書から録出したもの。

五車韻瑞——160 卷。明の凌稚隆編。経、史、子、集、賦の 5 部に分け、各部に二、三、四字の熟語を列ね、その出典を明かにしたもの。五車とは書の多いこと、瑞は美称である。

264、和文読本

4 卷 4 冊。稲垣千穎輯。明治 15 年(1882)刊。神皇正統記、増鏡、大鏡、太平記、今昔物語、徒然草、源平盛衰記、平家物語などから各種の文例をとって係結や段落を明示し、省略語を補ったりして、初学者の誦読に便ならしめたもの。2 組あり。

265、(欠本)

266、爾雅註疏

11 卷 5 冊。(晋) 郭璞註。(宋) 邢昺疏。爾雅の参考、注解書である。別に、11 卷 4 冊あり。

爾雅——3 卷。書名の爾は邇(ちかい)、雅は正で、正に近い語を積いたという意。積くところの文字は天文、地理、音楽、器材、草木、鳥獣の広汎にわたっているが、詩経中の語が多い。

267、官板 唐宋八大家文読本

30 卷 16 冊。(清) 沈徳潜撰。文化 11 年(1814)刊。唐宋八大家の文を集め、毎篇評点を加えて初学の人模範としたもの。(唐) 韓愈文 6 卷、(唐) 柳宗元文 3 卷、(宋) 欧陽修文 5 卷、(宋) 蘇洵文 3 卷、(宋) 蘇軾文 7 卷、(宋) 蘇轍文、(宋) 曾鞏文、(宋) 王安石文各々 2 卷。

268、纂評唐宋八大家文読本

30 卷 16 冊。松本仁吉纂評。明治 25 年(1892)刊。

269、増評八大家文読本

30 卷 16 冊。頼襄増評。明治 12 年(1879)刊。

270、続唐宋八大家文読本

18 卷 12 冊。(宋) 王安石著 村瀬季徳編次。文政 8 年(1825)刊。

沈徳潜の唐宋八大家文読本に倣い、その中にもれた韓愈、柳宗元その他諸大家の文 353 篇を輯録したもの。

271、文選

60 卷 12 冊。(梁) 昭明太子撰。(唐) 李善注。最初は、梁の昭明太子編で 30 卷、周代から梁代までの文章詩賦を集めたもの。後、唐代に李善がこれに注して 60 卷とした。文選とは、文を選んだということから名づけたものである。

272、文選正文

12 卷 13 冊。(梁) 蕭統(昭明太子)撰。兼山先生訓点。文政 11 年(1828)刊。文選の注解参考書である。2 組あり。

273、(欠本)

274、(欠本)

275、(欠本)

276、(欠本)

277、(欠本)

278、(欠本)

279、(欠本)

280、(欠本)

281、言葉のつかね緒

1冊。本居宣長著。享和2年(1802)版。内題には「後撰集詞のつかね緒」といっている。「後撰集」中の詞書コトバカキ(和歌の序文。まえがき)の正しくないものを訂正加削したもの。
(注)後撰集——後撰和歌集のこと。歌集で20巻、村上帝の天暦5年(951)に清原元輔等5人に仰せて撰進せしめたもの。歌数は1400余種である。

282、葎居集ムグライシユウ

前集3巻3冊、後集3巻3冊。黒沢翁満オキナマロ著。安政4年(1857)刊。著者の家集(個人の和歌を集めた書)である。別に3冊1組がある。

黒沢翁満は国学者で、名は重禮、通称八左衛門、葎居と号する。本居宣長に古学を究めた。安政6年歿、年65。

283、古今集遠鏡トオカガミ

20巻6冊。本居宣長著。寛政9年(1797)に成る。文化13年(1816)刊。古今和歌集を口語に訳したものの。

(注)古今和歌集——歌集で20巻、紀貫之等撰。延喜5年(905)に成る。作者122人、歌数1111首。

284、一話一言

32巻24冊。太田直次郎纂著、明治16年(1883)刊。但し、32巻の内8~15欠本。

原本は写本。安永8年(1779)から文政3年(1820)頃にかけて、親しく見聞したこと、思いよったこと、古今図書の抜萃等に互って備忘的に記したもの。「いちわいちげん」または「いづわいつげん」ともいわれ、50巻(大辞典)とも70巻(国書解題)ともなっている。

285、戦餘録

1冊。浜中弥兵衛編。明治39年(1906)刊。浜中弥吉陸軍中尉の戦死をいたみ、その徳をたたえた詩歌文集である。2組あり。

浜中弥吉中尉は本市若松の人で、日露戦争で沙河の大戦に参加し、明治37年12月12日戦死、享年28。編者浜中弥兵衛は故中尉の兄である。(同じものが2組ある)

286、うたぶくろ

6巻6冊。富士谷成壽著。弘化3年(1850)刊。歌論書である。父成章の説に基づいて、富士谷派歌学を大成したものとして、近世歌学史上独自の意義を有する。

287、(欠本)

288、(欠本)

289、(欠本)

290、(欠本)

291、(欠本)

292、(欠本)

293、(欠本)

294、(欠本)

295、(欠本)

296、(欠本)

297、(欠本)

298、(欠本)

299、(欠本)

300、汪份増訂 四書大全

清の汪份武曹が増訂したもの。天保13年壬寅12月に官許、嘉永7年甲寅8月に成る、大坂の秋田屋・

大塚屋と江戸の須原屋から発売、松阪学問所が旧蔵したもの。内容は序 1、大学章句 3、大学或問 2、中庸章句 6、中庸或問 2、論語集註 20、孟子集註 14 の全 48 冊。

301、増訂史記評林

漢の司馬遷が著したものを宋の裴駰が集解し、その後増訂された史記の注解参考書。1・9・12・24 冊目が欠本となっていて全 21 冊。